



(公財) 国際宗教研究所 宗教情報リサーチセンター

# 「ラク便利」 論文

→他の論文・研究ノート・小特集のバックナンバーは[こちら](#)をご覧ください。

\*印刷してご利用の際は2頁目以降を印刷して下さい。

論文

# カルト問題への認知宗教学的視点

## —感情システムと認知システムの相互作用からみる—

井上順孝

はじめに

日本の宗教研究におけるカルトという言葉の使われ方には、20世紀の最後の四半世紀あたりに大きな変化が生じた。1970年代頃までは、カルトは、宗教社会学における教団類型論という脈絡の中で用いられることが多かった。チャーチ・セクト・デノミネーションに加えてカルトという類型が提起されていた。カルトはおおむね当該社会における主流の宗教文化に比して周辺的な位置に存する宗教教団を指して用いられた。

ところが80年代から90年代にかけて、カルトが「反社会的活動を行なう閉鎖的な宗教集団」といった意味で用いられることが急に多くなってきた。この変化に関しては、世界的には1978年11月の人民寺院による集団自殺事件、日本国内では1995年3月のオウム真理教による地下鉄サリン事件が大きな影響をもっている。南米ガイアナで起こった人民寺院の集団自殺では、教祖ジム・ジョーンズの命令のもと、900人を超える信者が服毒などにより自殺した。事件を報じる英文雑誌の中には“The Cult of Death”の記事タイトルを付けるものがあった。1995年3月20日に東京で起こった地下鉄サリン事件では、教祖麻原彰晃の命令のもと、オウム真理教の幹部が地下鉄の複数の車輻でまいた猛毒のサリンによって14人の死者と6千人以上の負傷者が出た。この年以後、日本ではカルトの語が広く社会で用いられるようになった。

これ以外にも宗教団体によるテロや集団自殺、あるいは強引な勧誘、詐欺的手法による献金強制など、多くの社会問題が80年代以降は世界各地で起こった。これらをカルト、セクトなどと呼んで批判する傾向が社会に定着していった。宗教研究の分野でも、これをカルト問題、セクト問題、あるいはカルト・セクト問題として扱う研究者がとくに欧米や東アジアなどで増えた<sup>(1)</sup>。批判の対象とする団体をカルトとかカルト団体として括り、宗教団体とは区別して扱う研究者やジャーナリストなどがあるが、宗教研究者はそのようなスタンスを取らず、個別の活動や事件について批判的に取り上げるやり方が一般的である。

カルト問題は現代社会に特有ではないが、現代においては従来とは異なった様相が生じたとすれば、そこにはグローバル化や情報化の影響が介在している。自分が生まれ育つ中に接した宗教文化とは異なった宗教文化に接する機会が各段に増えている。またある新しい宗教的観念や行動形態が短期間で伝わりやすい情報環境ができた。

こうした社会環境の変化によって宗教意識や宗教情操に大きな変化が生じたように捉える研究者もいる。だがカルト問題の研究にはそうした表面的な新しさ、多様さに着目するだけでなく、常に人間の心に起こる問題、社会集団に起こる問題の1つとして捉える立場も必要である。その立場からすると、20世紀末より急速な進歩を見せている脳神経科学、進化心理学、あるいは広く認知科学と総称される分野での研究を参照することが欠かせない。認知宗教学的の視点

による研究である<sup>(2)</sup>。これによりカルト問題の研究にも新しい展望が開けてくる。とりわけ感情の働きについての最近の研究は、カルト問題においてなぜ人間が反理性的な考え方や行動に大きく支配されてしまうのかを考える上で欠かせない。

## 1. カルト問題へのいくつかのアプローチ

日本においてカルト問題が大きな研究テーマになったのはオウム真理教による地下鉄サリン事件以後だが、それ以前にも社会的規範を逸脱しているとみなされた団体の活動や教えなどに対する批判的な研究は数多くあった。とくに新宗教に対するものは、戦前にはいわゆる「淫祠邪教論」という批判のフレームがあって、現在のカルト問題を包摂するような視点であった<sup>(3)</sup>。戦後はこのフレームはあまり見られなくなったが、現在でも皆無ではない。あるいは韓国であると、「サイビ(似而非)宗教」という言い方が戦後なされるようになった。カルト的団体、あるいは異端的運動、疑似宗教といった意味合いがある。

これらの批判的言説においては、たとえば法を逸脱するような活動や非倫理的な教えや活動への批判と、それが新興の団体であるゆえに社会的に根付いていない活動形態をも展開したことで生じた批判とが混在していた。しかし、戦後の社会の中で多くの新宗教が社会的に比較的安定した存在になるにつれ、その混在はやや減少した<sup>(4)</sup>。とくに1990年に『新宗教事典』が刊行されたことで、新宗教の大半が従来日本の宗教的伝統を踏まえたものであることが明らかにされた。これらのことが関係していると考えられるが、批判は個別の反社会的と目された活動に集中する傾向が強まった。

オウム真理教によるテロや一連の犯罪行為、法の華三法行の詐欺事件、そして2022年7月の安倍晋三元首相の狙撃事件を契機としてふたたび話題となった統一教会<sup>(5)</sup>が1980年代以降のカルト問題の対象となった団体の代表例である。

日本におけるこのカルト問題を扱う視点として、代表的なものに次の3つが挙げられる。

- ①活動の違法性を問題にする視点
- ②神学的・教学的立場からの批判の視点
- ③教えや活動における非倫理性などを問題にする視点

最初の視点は宗教団体において、詐欺、脅迫など刑法、民法などで禁じられている行為、あるいは人権の侵害に当たる行為が多発することを問題視するものである。どこからカルト問題になるかは、違法性という点を基本的フレームにできるので、対象となる団体とともに、どのような点が問題であるかの議論はもっとも明確になる。

2番目の視点は、自らの拠って立つ神学的ないし教学的立場から、不適切な宗教活動とみなすものへの批判の視点である。これもフレームは明確になるが、それぞれの宗教的規範が基準にされているので、一般性に欠ける弱点もある。さらに宗教社会学や宗教心理学、あるいは宗教人類学などでは、特定の宗教的規範に基づく議論はなされないのが、研究への関わりは限定的である。

3番目の視点は、当該団体における非倫理的活動、反社会的傾向といった点を問題にするものである。一般的には経済的搾取や収奪、行動の束縛などで信者が非常に不幸になったと感じる例が多発する事例を取り上げることが多い。広くカルト問題一般に適用しうる視点となるが、何が非倫理性や反社会性に当たるかの具体的内容に踏み込んでいくと、やはり多様な議論が生じ得る。

この3つのいずれにおいても、批判対象となる団体を宗教団体とは区別するやり方がとられることがある。典型的なのは冒頭にも触れた、カルト(団体)と宗教(団体)は異なるのだとする立場である。この区分で一見、議論は分かりやすくなるように思えるが、とりわけグローバルな視野から論じようとする、境界線の基準を設定するのは容易ではないことに気づかされる。

また、勧誘の手法に着目して、カルト団体はマインドコントロール(ときに洗脳)の手法を用いると指摘する人たちがいる。確かに訓練された巧妙なやり方で勧誘する例は、カルト問題において数多く見いだされてきた<sup>(6)</sup>。ただ、そこで説明されるマインドコントロールと呼びうる手法そのものは、家庭、企業、学校、各種の団体に広く見出される。またどこまでシステム化されていたらマインドコントロールによる勧誘と言えるのかも難しい議論になる。もっとも問題なのは、マインドコントロール論には、勧誘行為だけでなく、そこで提示された内容についての善悪の価値観が介入してくる点である。マインドコントロールはカルト問題に限らないことは明らかなので、「悪いマインドコントロール」と「良いマインドコントロール」に分ける手法がとられることがある。こうなると、マインドコントロールという手法よりも、行為の目的の善悪が分かれば目になってしまう。

本稿では、認知宗教学的視点から脳神経科学、進化心理学、ユニバーサルダーウィニズムなど、とくに1990年代以降に急速な展開を見せた研究成果を援用して、なぜカルト問題は絶えないのかという基本的な疑問の整理を試み、ともすれば見過ごされがちになる点について考察する。この議論においては、カルト問題は宗教現象において独自の領域にあるとは前提しない。入信ないし入会、あるいは所属の継続の理由を考えようとするとき、カルト問題の対象となる団体においても、人間の恐怖や不安などといった同様の心の動きを基盤としているのが明らかだからである。

確かにカルト団体と目された団体や宗教においては、入信や信仰の継続において恐怖や不安といった感情の働きが非常に大きな働きをする。しかし、宗教においてもこの点はほぼ同様である。仏教における四苦八苦、すなわち生老病死の四苦と、これに愛別離苦、怨憎会苦、求不得苦、五陰盛苦を加えた八苦は、人生における不安、苦しみ、恐怖などをほぼ網羅している。キリスト教においては、地獄の観念がもたらす恐怖は入信や信仰の継続に大きく関わっている。キリスト教に関わるジョークは数多くあるが、その一つに死期が迫った人を改宗させる話がある。天国に行けるよう洗礼をすすめる家族や牧師の説得に耳を貸さない病人に、ある雄弁家が3分間病人に語りかけたら洗礼を受けることを決めたという。何を話したのかと家族が聞いたら、地獄に落ちたときの苦しみを3分ほど話したというのがオチである。つまりは天国のすばらしさより地獄に行くのが怖いから入信を受け入れたという皮肉をこめたジョークである。こうしたジョークが生まれ、受け入れられる背景には、大前提として地獄の恐怖について説くことは、絶大な効果をもたらすことがあるという認識である。

恐怖は死後のことに対するものだけではない。東アジアではむしろ現世における災いや苦難への恐れへの対処が宗教において大きな比重を占める。新宗教における入信理論として「貧病争」論が戦後の日本の新宗教研究では広く使われた。経済的困窮、病氣治し、人間関係の悩みである。生きていく上で生じる苦しみや悩みの解決と宗教への入信を関連づけた考えである。中国の道教においては除災招福が大事であり、この考えは日本にも広く影響を及ぼしてきた。現代でもそれは同様であり、厄除けの流行などはそれを典型的に示している。これは特定宗教への入信に関わることは少ないが、広く民俗信仰として生き渡っており、こうした思考法が宗教活動全般に広く影響を与えてきている。

宗教の側は生きていく上で生じる諸々の苦しみがもたらす恐怖、不安などの克服の手段を提

供してきた。現世の苦しみが死後に報われるという教え、苦しみは神の意志で、理由があるから耐えなさいという教え、現世の苦しみが過去のカルマによるから、現世で良き行ないをすれば、来世ではより良き世界に生まれるといった教え。それぞれの宗教において、多様な恐怖の源に対する克服の方法が、心理面あるいは行動面で説かれる。カルト問題でもこの点は変わらない。現実には、その説く内容に社会的に許容し難い面が含まれているとして問題にされているわけだが、基本的構図は大差ないことも認識しておかなければならない。「カルト団体」が行なっていることは、宗教団体一般が行なっていることとはまったく異なると見なしてしまうと、むしろカルト問題の根幹を見失う。共通の基盤が存在することをおさえておかないと、追及すべき点をかえって見逃す。

カルト問題では、ほぼ共通する疑問が提起されている。なぜカルト問題を頻発するような団体に入るのか？入会后、心理的、社会的に不利益をもたらされるようなことに直面しても、その団体から脱会しないのはどうしてか？一般的に言えば、理性的には斥けた方がいい教え、あるいは自分や周りの人を不幸にしているようにしか見えない教えをどうして受け入れるのかという疑問である。こうしたことは日常茶飯に起こっており、カルト問題を最初から特殊なフレームを当てはめて捉えようとしない方がいい。

## 2. カルト問題と「恐怖」

カルト問題においては、とくに「恐怖」の感情が果たす役割の比重が大きいと捉え、とくにこの点に焦点を絞り、まず認知宗教学の視点に関わるような最近の研究について触れる。感情は大半が遺伝的に組み込まれている反応のシステムと、成長の過程で文化的に獲得された認知システムの双方に影響を受けることが明らかにされてきている。その影響の及び方はきわめて複雑に絡みあっているが、それを解きほぐそうとするような研究が近年は多く見られる。ここでは認知心理学者の戸田正直が提唱したアージ理論 (urge theory)、またアントニオ・ダマシオの感情についての議論、その他を参照しながら、カルト問題において恐怖の感情がどのような役割を果たしているかを考察していく。

カルト問題における恐怖の感情の占める役割の大きさは、1980年代以後の日本におけるカルト問題においても明らかである。オウム真理教教祖の麻原彰晃は、その説法において「人は死ぬ、必ず死ぬ、絶対死ぬ」と繰り返し、死の恐怖を信者たちに説き、同時にその恐怖を体感させるようなビデオも作成していた。死後恐ろしい地獄を避けるためには、尊師（グル）と位置付けられた麻原に絶対的に従う修行が必要とされた。

統一教会の靈感商法においては、全国靈感商法対策弁護士連絡会の弁護士たちが明らかにしているように、先祖の解怨のための多額の献金が必要とされた。先祖の感じているに違いない恐怖が持ち出されている。国内のカルト問題においては、「近く災難に遭う」「自身や身近な人が大きな不幸に見舞われる」「地獄に落ちて苦しむ」「先祖が苦しみから逃れられないでいる」といった類の言説が、頻繁に使われているのは広く知られている。2000年に法の華三法行の教祖福永法源と幹部が詐欺罪の容疑で逮捕され有罪判決を受けた。福永はいわゆる「足の裏診断」で高額な献金を求めるなどしたことが詐欺罪とされた。足の裏を診断して、このままだと癌になるなどと述べ、恐怖心を煽った。次第に費用が高額化してやがて200万円以上となる短期研修をさせたり、多額の献金を求めたりした。「足裏診断マニュアル」なるものも作成されていた。

こうした事例が絶えない現実を前にすると、カルト問題では、理性的な考え方、合理的な考え

方からすると根拠がなさそうなこうした言説が、なぜかくも大きな力を発揮するのか疑問が生じる。ただこの疑問は宗教全般が理性や知性で説明しきれものではないとされていることを踏まえて考察すべきことである。カルト問題では、文化的に継承されてきた宗教的言説が、部分的に切り取られ用いられているからこそ、複雑な様相を呈するのである。

恐怖の感情を含む感情一般の働きの理解には、意識と記憶に関する最近の研究が参考になる。意識や記憶についての研究は1990年代以降、非常な展開をしてきている。感情の面からカルト問題を考えるなら、意識や記憶に関する最近の議論のうち参考となるものを拾い上げていかなければならない。なお、「感情」という言葉であるが、学術的な議論においては、感情と情動を区別して議論するのが一般的になってきている。ただその違いについては研究者ごとの違いもあって、きれいに分けるのは難しい。また英語でも感情についての議論で、emotion, feeling, affect(ion)などが用いられていて、やはり使い方が統一されていない。ここではとくに細かく区分する必要のないときは「感情」という語で記述し、感情、情動などを区別してなされた議論のときはそれに従うことにする。

### (1) 戸田正直の「アージ理論」

戸田正直は「アージ理論」の提唱者である<sup>(7)</sup>。戸田は感情の働きの焦点を当てた研究の古典的なものとしてウィリアム・ジェームズの研究を挙げている。ジェームズは“*We feel sorry because we cry*”（泣くから悲しい）とか、“*We don't laugh because we're happy - We're happy because we laugh*”（幸せだから笑うのではなく、笑うから幸せなのだ）などの例を挙げて、感情の末梢（起源）説と呼ばれる考え方を提起したことで知られる。いわゆる「ジェームズ＝ランゲ説」である<sup>(8)</sup>。ジェームズのこの議論ではemotionの語が使われている。

その後1920代に「キャノン＝バード説」が提唱された。米国の生理学者キャノン（Walter B. Cannon）と、その指導を受けていたバード（Philip Bard）らは、生理的変化に先立って情動が経験されるのだとする中枢起源説を主張した。さらに1960年代になると「情動の二要因説」と言われる「シャクター＝シンガー説」が提唱される。スタンレー・シャクター（Stanley Schachter）と、ジェローム・シンガー（Jerome Singer）の2人によって提唱された。情動は生理的な喚起とその原因に対する「認知的解釈」の相互作用で生じるという説である。

感情システムに関して、感覚の作用、脳内での処理、その身体的表現などについての数多くの実験が繰り返され、明らかにされた部分が増える半面、謎がますます深まった。とりわけ感情システムと認知システムの相互作用には、記憶、意識の働きが関与するから、関係の複雑さがいっそう浮彫にされた。

戸田のアージ理論は、感情システムを、アージ（urge）、ムード状態、感情的態度の3種類に分けて議論した点が特徴的である。議論の大前提として、感情システムは、種を超えて進化した生き延び用のソフトウェアであるとしている。3つを分ける1つの指標は持続時間である。アージは短時間の持続で、数秒から数時間持続する。これはアージが心身資源を多く消費するからである。ムード状態は絶えず微妙に変化し、無数にあるとする。そして大半は名前を持たない。また直接の行動傾向を持たず、アージに対し一般的に拡散した影響を持つとされる。感情的態度はいったん形成されると長期持続する。「恐れ」はこの3つの相で同じ名前を持つが、これは例外的とする。また好き・嫌い、罪、恥、誇り、名誉などの感情的態度のように、対応するムード状態やアージが特定できないものも多いとする。

これらの感情システムに認知システムが関わってくるという戸田の指摘は、カルト問題においても参照すべき点となる。恐れや怒りのような感情の起源は、かなり原始的な動物にまでさかのぼれるのだが、人間の場合、置かれている状態の評価、すなわち「評価モニター」の働きが突出しており、これは認知システムの援助によってなされる。これにより各種のアージが全体状況の把握であるムード状態を形成する。なお、ムード状態は原則的に無限の種類があると戸田は述べている。こうした経験によりある対象や状況への感情的態度が形成される。「怖い人」「怖い話」「怖い場所」「怖い集団」など、実際に直面しなくても想起するだけでもその人に恐怖をもたらす対象ができあがる。

このアージ理論をカルト問題に適用するとどうなるか。現代社会においては多様な宗教文化、宗教的観念が拡散されている。グローバル化と情報化の時代には、日本における宗教文化についての観念の多様化は急速であり、情報手段の多様化はその入手先のハイパー化をもたらしている。つまりそれぞれの宗教ごとの体系だった知識ではなく、それぞれに断片化されて、ユーザーの側の関心に応じて編集しやすくなった状況である。この点はドーキンス(Richard Dawkins)のミーム論を応用すると理解しやすくなる<sup>(9)</sup>。ミーム論は進化論をベースに展開されている。宗教的観念や理念が長く継承される理由についての従来よく見られた説明との違いはそこにある。当該文化の本質を構成しているからとか、当該文化の基層であるから長く継承されるといった説明をしない。これらは本質論的議論と言うべきもので、そうした見方は排除されている。進化論をベースにするから、競合関係にあるミームは環境に適応したものが生き残るとされる。適切な宿主(人間)をみつけたミームは生き延びるのである。この見方にミーム論の発想の斬新さがある。

団体が提供する認知システムには、文化的な継承物、宗教団体等が保持するいわば「ミーム」が含まれているとみなすと、その団体ごとに自分の目的を達するために都合のいいミームが採択されていることになる。カルト問題に頻繁に出現するミーム複合体は生き延びやすいものとみなされる。ミーム複合体は複数のミームが関与したものである。先祖への供養が高額献金を求めるための手段に組み込まれているのは、先祖供養の教えが伝統仏教にも重視されていることから分かるように、日本の宗教文化においては生き残りやすいミームであったからとみなせる。

宗教に関わる認知システムは、個人の宗教経験や宗教についての知識に依存する。その人の意識のあり方、記憶と相互作用する。他方で感情システムは大半が遺伝的に継承された部分に大きな影響を受ける。エピジェネティクスな変化を考慮するなら、育った環境による変化は当然に生じるが、恐怖のようなアージの発動は、おそらく遺伝的なものが決定的に大きいと考えられる。

日常生活において、各人はこうした瞬間瞬間の状況の変化に感情システムが働いているが、そこに認知システムが絶えず影響を及ぼす。とするなら、ある人の理性的とは思えないような反応については、そのときの感情システムの作動に関係した状況はどのようなものであったか、どのような認知システムが形成されていたのか、この2つの側面とその関係について考察しなくてはならない。

戸田は現代社会で感情がうまく働いていないのは非常に強い感情の場合で、弱い感情は十分役立っているとする。つまり普段の生活で生じる多くの弱い感情はたいていうまく働いているが、非常に強い感情は、現代社会でうまく作動しないことが多くなる。カルト問題では、入信にしろ信仰の継続にしろ非常に強い感情が働くことが多い、と推測される。戸田の見解に従った場合、人間の生き延びのためのシステムがうまく作動しない強い感情が働く状況に焦点を当てるべきことが示唆される。

## (2) ダマシオの感情・情動に関する議論

アントニオ・ダマシオはソマティック・マーカー仮説を提唱したことで知られる。これは一見情動とは関係のない意思決定においても、情動的な身体反応の信号が不可欠な役割を果たしているとする仮説である。『進化の意外な順序—感情、意識、創造性と文化の起源』において、脳神経科学や進化論を踏まえて、動物から人間に至る感情・情動の働きに触れている<sup>(10)</sup>。情動があるからこそ、日常生活での推論や合理的な意識決定ができると主張している。ダマシオもまた1世紀以上前に示されたウィリアム・ジェームズの知見を評価し、感情・情動と身体との関係に注目している。ダマシオは感情(feeling)と情動(emotion)とを明確に区別している。情動は瞬間的なもので感情のように持続的なものではないとみなしている。またすべての情動は感情を生むが、すべての感情が情動に由来するわけではないとしている<sup>(11)</sup>。

ダマシオは“as-if body loop”(あたかも身体ループ)という考えを提起した。身体に感じられることを脳だけで推論することで、たとえば恐れをもたらすものに直面しなくても、恐れをもたらす状況を脳が推論して、恐れを感情を抱くなどである。ある言説が恐怖と結びついた場合、その言説を想起するだけで恐怖が生じる。カルト問題では、この“as-if body loop”を頻繁にまた強い情動を喚起させながら作動させる言説が利用されている可能性がある。

ダマシオはこの書で「感情はホメオスタシスの心的な代理」としている。感情は生体内の生命活動の状態を、その個体の心に告知する手段であり、ポジティブからネガティブの範囲で表現される。ホメオスタシスの不備は主にネガティブな感情で表現されるのに対し、ポジティブな感情は、ホメオスタシスが適切なレベルに保たれていることを示すとする。体の中から発せられる化学的シグナルが末梢神経系を介して脳へと伝達されて、脳での処理の結果感情が生まれるという考え方は時代遅れであって、身体と神経系は混合、相互作用を介して連絡しあっているのだとする。また腸管神経系の重要性を主張し、腸管神経系は周縁的なものではなく中枢的だとする。ホメオスタシスの視点から、宗教的信念についても触れている。宗教的信念の発達は親しき人の喪失からくる悲しみに最も密接に関係するものである。親しき人の喪失は、死の必然性や、死をもたらす得るあらゆる状況について考えるよう人々を仕向けた。宗教的な信念や実践が与えてくれる感情やホメオスタティックな動機付けが最も顕著に見られるのは仏教だと述べている。欲望を抑制することで苦しみを取り除こうとしたからだという。ダマシオはむしろ宗教史を専門にする研究者ではないが、死が宗教において特別重要な位置を占めることを大前提にしている。

感情が動機になって、芸術、哲学的探究、宗教的信念、道德規範、司法制度、政治的ガバナンスと経済制度、テクノロジー、科学などの知的発明がなされたとするので、これを敷衍するとカルト問題が起こる理由も感情の働きを重視すべきことになる。恐怖はホメオスタシスを脅かす。ホメオスタシスを回復しようとしてどう感情の動きが働くか。そこに恐怖はどういう役割を担わされるのか。

嶋田総太郎は『認知脳科学』<sup>(12)</sup>において、認知脳科学の立場から、情動と感情、記憶と学習、社会性認知などについて論じている。嶋田はダマシオの区分に従って、情動と感情とを分けている。情動は個体が何らかの環境状態に遭遇したときに、それによってほぼ無意識的に引き起こされる身体反応で、ここには生理的活動及び脳活動が含まれる。感情はこれらの身体反応の意識的経験とする。情動は外から計測可能なので動物に対しても調べられるが、感情はヒトを対象にしないと調べられないとする。



嶋田はルドゥ (Joseph LeDoux) の「情動の二つの経路モデル」に言及している。これは外界からの情動刺激が2つのルートを通るという考えである<sup>(13)</sup>。1つは視床から直接扁桃体に行くルートで、速いが不正確な情報となる。もう1つは視床から大脳皮質の感覚野を経由して扁桃体に行くルートで、少し遅いが正確である。目の前の長い物体を蛇と違って飛びのき、縄と気づいて落ち着くような例が挙げられる。

認知システムが感情システムに関与しているという見方と矛盾せず、かつ2つの経路モデルの存在が人間の反応の時間的差やそこでの違いなどを説明する。カルト問題ではしばしば勧誘する側が人間の不安につけるなどの指摘がなされる。マインドコントロール論では、とくにこの点に注意が喚起される。ではなぜ特定の状況や言説が相手の情動を刺激したり、ある感情的態度を生じさせるに至るのか。2つの経路のいずれにも作用していく言説やその言説がなされる環境が作られている可能性がある。ある団体に勧誘されて入会したものの、後に脱会した人からの体験談は、この問題を考える上で非常に参考になる。

この問題をさらに考察するには、記憶の働きを踏まえる必要がある。過去の自己の経験に関する記述は記憶によっているからである。それゆえ、当人が述べたことはすべて事実としては扱えない面がある。記憶は通常3つの段階で議論される。encoding (符号化または記銘)、storage (貯蔵または保持)、retrieval (検索または想起) のそれぞれの段階である。嶋田は記憶のエラーは符号化、貯蔵、想起のすべての段階で起こるとしている。符号化の段階では浅い処理よりも深い処理が記憶に残りやすいとか、ほかの情報と結びつけて処理する方が記憶に残りやすいなどの特徴も挙げられているが、これらすべてカルト問題において参照すべき記憶の特質である。

### 3. カルト問題における「感情システム」と「認知システム」

#### (1) 記憶の書き換え

カルト問題においては、いつ誰にでも作動する恐怖に関連する認知システムが重要な役割を果たす。「教祖の教えに従わないと地獄へ墮ちる」「高額な献金をしないと先祖が苦しむ」「この団体を去ったら天国へ行けない」「教えに背いたら永遠の苦しみ」「もっと修行をしないと苦難に襲われる」等々の言説は“as-if body loop”を作動させるに違いない。強い恐怖心はそのたびに生じる。ただこれについても宗教一般に程度の差はあれ“as-if body loop”による恐怖を作動させる例が数多く見いだされることを指摘しなければならない。ブッダの教えの中には、ダマシオが特徴づけたように、確かにホメオスタシスの維持に貢献しているようなものがあるが、日本仏教には地獄の観念がもたらす恐怖を、人々の仏教教化の方法として用いてきた長い歴史がある。源信の『往生要集』は良い例である。また地獄の有様を視覚的に構築する上で、地獄図は少なからぬ役割を果たしてきた。これだけでも、何がカルト問題に特徴的な恐怖の作動かを判断するのは非常に難しいことが分かる。

“as-if body loop”の作動は、記憶があればこそである。カルト問題における恐怖の役割を考えると、記憶と情動のつながりの密接さと、記憶は書き換えられるという点に留意すべきである。記憶と情動のつながりは大脳辺縁系におけるパペッツ (ペイペッツ) 回路とヤコブレフ回路の関係の深さで論じられている。パペッツ回路は記憶に関与するとされる海馬体、乳頭体、視床前核群、帯状回後部などのネットワークである。ヤコブレフ回路は情動に関与するとされる扁桃体、視床背内側核、前頭前野帯状回前部などのネットワークである。両者は位置的にも近く、相互に情報を伝え合っている。あるエピソード記憶が恐れ的情動と深い結びつきを持ってしまうと、そ

の記憶が想起されるたびに恐れ的情動もまた喚起される。「先祖が祟る」という言い方は、多くの日本人は知っているだろう。だがその言葉が強い恐れ的情動と結びつくようになった人にとって、それはよく耳にするような日本の民俗信仰にとどまらないものとなる。

記憶の記録、保持、想起の3つのステップは、ニューロンのネットワークによってなされるとする考えが主流になっている。それゆえネットワークの一部が置き換わると記憶が変わる。想起されるごとに記憶は大なり小なり書き換えられる。明らかな書き換えが起こってしまったものは過誤記憶と呼ばれるものになる。置き換わるのがささいなことであれば多くの場合たいしたことにはならない。しかしたとえば犯罪の証言者の過誤記憶は大変なことになる<sup>(14)</sup>。

カルト問題において過誤記憶はどのようなときに問題となるか。もっとも注意が必要なのは、ある団体に属していた信者が脱会したときに語るその団体に関わる記憶と、所属していた時点でもっていた記憶とのずれである。これはなかなか確かめるのが困難であるが、一般的には所属しているときには、その団体に所属していることに都合がよくなるように記憶は形作られ、脱会したときは逆になることが想定される。脱会者から聞き取りをした人は、過誤記憶の可能性について常に考慮しておかないと、バイアスの強い意見聴取になってしまう可能性が出てくる。

## (2) ナラティブ思考

宗教の布教や教化の場面で、恐怖を喚起するのは、そこで語られるストーリーである。怖い場面や出来事を見て生じる恐怖もあるが、多くは宗教的指導者なり教師が語る固有のストーリーによって“as-if body loop”の仕組みが作動したりする。ストーリーの影響について考える際には、思考が分析的思考とナラティブ思考に分けられるという視点が参考になる。心理学者ブルーナー (Jerome Seymour Bruner) は、分析的思考 (logico-scientific mode) に対するナラティブ思考 (narrative mode) の重要性を指摘した。ブルーナーはナラティブは本人が体験したことを語るストーリーとしており、きわめて主観的なものである。分析的思考は論理的に考えた筋道だった思考である。ナラティブ思考は偶発的なエピソードから構成された一連の物語に基づいた意味づけ (センスメイキング) を行なう思考である。論理的な関係よりも、逸脱したり、例外的なものに、より重要性を見出し、理解しようとする認知過程とされる。

虫明元はこの分類を脳のネットワークに関連づけている。分析的思考とナラティブ思考の対立は、執行系ネットワークと基本系ネットワークの働きの違いの一部を反映しているのでは、とみなしている<sup>(15)</sup>。執行系ネットワークとはセントラル・エグゼクティブ・ネットワーク (CEN) と呼ばれるもので、基本系ネットワークはデフォルトモードネットワーク (DMN) と呼ばれるものである。CENは認知機能全般に関わり、特に外的世界に注意を向け、カテゴリー認知、抽象的な概念の生成や、ルールに従った目標達成の行動の計画に関わる。DMNは安静時の活動の主体をなすとされる。そうすると、外界の変化などに集中せず、また特に何かを分析しているわけではないときは、ナラティブ思考に適した状態にあることになる。

カルト問題においては、なぜ冷静に考えればおかしな話、あるいは論理的でない話を理性的に判断できないのかが一つの疑問になる。人間はナラティブ思考に惹きつけられるということを理解すると、この点はある程度納得がいく。またほとんどの宗教的なストーリーはナラティブ思考に訴えていると言える<sup>(16)</sup>。さらに言えば、ほとんどの人は日常生活においては、分析的思考よりもナラティブ思考を優先させる機会が多い。政治家の演説、商品のコマーシャル、友人・知人と

の会話、その他多くの発言や会話にナラティブ思考が働いている。あやしげな勧誘の際にだけ論理的思考に切りかえるということ自体が、よほど訓練した人でなければなかなか困難と考えられる。

「先祖が非常に苦しんでいるので、これを救うには献金するしかない」「今の生き方では地獄に堕ちてしまうから、グルに帰依してこれを避けよう」「恐ろしい苦難があなたを待ち受けているから、この（高額な）お守りを肌身離さず身につけておこう」。こうした類の話を受け入れたとすれば、それはナラティブ思考に従っていると言える。

相手の話に関心を抱くだけでなく、その人が説く教えを受け入れるに際しては共感の働きも重要になってくる。共感には認知的共感と情動的共感がある。相手の話す上記のような教えを受け入れるときには、認知的共感だけでなく、むしろ情動的共感が大きく働いている可能性がある。恐れ的情動を伴わせる話であればとくにそうであろう。

カルト問題で生じることが一般の宗教的営みとどこが異なるのか。カルト問題は法を犯していることを指摘できたり、社会的批判が多く存在することを1つの特徴にはできる。だが人間の感情・情動の働きの特徴をおさえて活動がなされているという面では、両者にほとんど違いは見受けられない。ここにカルト問題の厄介さが存在する。批判の場を設定しようとするなら、いうなれば多次元ベクトルのアプローチが適切である。1つの基準で明確な境界線を引くことが困難だからである。法からの逸脱、社会的批判の存在にしてもあくまで1つの指標である。フランスのいわゆるセクト法が10の指標を出したのは、ここで言う多次元ベクトルの発想に近いが、固定された指標によってのみ境界線について論じるのは難しく、現実の宗教現象と向かい合うと、どのような指標を見出しうるのかといった、指標の設定自体から議論を重ねる必要がある<sup>(17)</sup>。ここには文化ごとの違いを考慮する視点も入ってくる。

#### 4. 遺伝的継承と文化的継承の協働と競合の中の個人

誰も抱く恐怖や強い不安の対象に対する反応は、多くが遺伝的に継承されている。恐怖をもたらすものは環境にあるが、身体内にもある。外的なものは蛇に出会ったときの情動のようなものであり、内的なものは突然の激しい胃痛に見舞われたようなときである。アージ理論ではそこに認知システムが作用するから、遺伝的な反応もその影響で成長とともに発現の仕方が変化する。認知システムには、個人的経験によって形成された認知のありようと社会に流布している認知のありようがある。たとえば蛇への恐怖は日常的に蛇を見かけるような環境で育てばやわらぐ可能性がある。森で大きな熊に出くわせば恐怖を覚えるだろうが、動物園の熊は檻から出れないから、近くで見ても安心だという社会的な認知を受け入れれば、数メートルの近さで見てもさほど恐怖を覚えないうらう。激しい胃痛も病院で診察してもらい、医者から食あたりなのでこの薬で治ります、と言われれば恐怖は和らぐ。医師への信頼という社会的認知が作動するからと考えられる。

恐怖に限らず、あらゆる感情の発現には、遺伝的要因と社会的・文化的に継承されたものからの影響が複雑に絡み合っている。このことは、二重相続（継承）説（DIT : Dual Inheritance Theory）や二重過程理論（Dual Process Theory）などで論じられてきたことを踏まえると、当然に導かれる。DITはボイド（Robert Boyd）とリチャーソン（Peter Richarson）が1980年代に示した考えである。二重というのは、遺伝的継承と文化的継承の二つの絡みを指している。

おおまかに言うなら、ある世代から次の世代への行動パターンの受け渡しは、遺伝的継承と文化的継承の両方を使ってなされるが、両者は独立ではなく、文化的継承のパターンは様々な遺伝的要因によって規定されているといった考えである。そして文化進化のメカニズムを考えるに際して、いくつかの心理バイアスを想定した。とくに重視したのが頻度依存的バイアスである。多数派の意見を取り入れていく「多数派同調」などが良い例である。

二重過程理論はスタノヴィッチ (Keith E. Stanovich) が示した考えである。『心は遺伝子の論理で決まるのか—二重過程モデルでみるヒトの合理性』<sup>(18)</sup>の中で、スタノヴィッチはドーキンスのミーム論を踏まえながら、彼が TASS と呼ぶ「ショートリーシュ型」のプロセスと分析システムとする「ロングリーシュ型」のプロセスの相互作用について論じている。遺伝的に組み込まれた反応と後天的に獲得された反応は相互に複雑に影響し合う。人間は「ロングリーシュ型」の反応を組み込まれた火星探査機のようなものだと比喩する。地球からの指令を待っているのは適切に目の前の事態を処理できないので、あらかじめ組み込まれたプログラムを作動させて対処する。ここで火星探査機は人間を、また地球からの指令は遺伝子を比喩している。

TASS と分析的システムの対比は、ヒューリスティック処理と分析的処理、直観システムと推論システム、動物的制御システムと規範的制御システムといった対比とほぼ同意義である。さきほどの情動の2つの回路の指摘にも通じるが、人間の反応は大きく2つのパターンがあって、両者の併用、混在、対立といったダイナミズムで理解することで、人間の考え方や行動における矛盾や非合理性を避けえない理由が納得できる。

遺伝的継承と文化的継承の中に生きる人間という観点からは、人間は常に理性的な判断を優先させて生きることができないと導かれる。理性的な判断は文化的継承に大きく依存するが、他方で感情はむしろ遺伝的継承に大きく依存する。なぜカルト問題が絶えることがないかの議論には、この点が重要になる。

スタノヴィッチはミーム論を踏まえているので、各社会における文化的継承を、良い文化か悪い文化か、優れた文化か劣った文化かなどといった尺度を中心として比較しようとしなない。進化論を基盤にすると、生物でも文化も、それが環境に適応しているから存続するという見方になる。この点が従来の主流の宗教研究とは視点を異にする。現存する種はすべて進化の結果である。生物の大半を占める各種の昆虫も、さまざまな哺乳動物も、そして現生人類もすべて生物の進化の一形態である。人類は言葉を駆使できる種である。しかし空は飛べない。地磁気を感知することもできない。生物の環境への適応の仕方は常に多様で予断を許さない。文化的なものもそのように展開したと考えると、ミーム論の発想はきわめて受け入れやすい。ミームは遺伝子における DNA のようなものを想定できないから、空疎な概念とする批判もあるが、文化の展開、そして宗教史の展開を新しい視点から捉えうる興味深い発想である。

宗教史の展開をみれば、創始者が明確な宗教の場合でも、創始者の教えや活動に対する解釈はその宗教の内部においても多様である。分派や分立が起こればその多様性はさらに幅が広がる。現代のようなグローバル化や情報化が進んだ状況にあっては、歴史的に多様になった教えの解釈が、グループごとにさらに多様に解釈されていく。

文化に組み込まれて継承されている宗教的観念や儀礼、行動様式は、時代ごと地域ごとの変異は明らかであり、それゆえ元はこのようなものであったことを示すのが困難である。ただその広がりの中で多くの地域に見られる信仰形態、長く続いている信仰形態を指摘できる。ミーム論の見方を導入すると、このような宗教史の展開は、そのときどきのその地域における人々が置

かれた環境に対する文化的適応の姿である。一神教が優れているとか、多神教の方が人間には自然であるといった方向への議論には展開しない。たとえば世界的な広がりを持つ宗教の出現は、各地の自然環境、社会環境によって生じる多様なニッチに、広く受け入れられるような展開がなされたからと理解される。

この脈絡でカルト問題も見ていく必要がある。カルト問題においてよく言及される教祖への絶対的服従、高額な献金、正体を名乗らない勧誘などの要素は、多くの宗教に類似のものが見いだされる。カルト問題が議論されるときには、教祖への絶対的服従の要素は否定的にみなされがちであるが、宗教一般では「宗教的指導者への帰依」などはむしろ尊重されるのが常である。信仰仲間とのつながり重視は一般的である。

そのような境界線の入り組みを踏まえながらも、見定めるべき課題がある。しばしば問題とされる高額献金もその1つである。名称は献金、お布施、寄付など違いはあっても、その額もさることながら、それが強制だったのから、自ら望んでそうしたのかの違いには、細かな注意が必要である。たとえば子どものいない人が莫大な遺産の大半を社会福祉団体に寄付したり、宗教団体に寄付したりしようとする例であれば、その行為にはさほど批判は起こるまい。しかし、1980年代に批判が起こった統一教会の靈感商法がそうであったように、相手を心理的に追い詰めた上でなされる献金には社会的に強い批判が起こる。すべて強制されたかどうかは難しい面はあるにしても、統一教会の場合は少なからぬ数の元信者からの返還訴訟が起こっているのだから、自ら選んだ献金だけではないことは明らかである。

あるいは「宗教的指導者への絶対的帰依」「正体を名乗られない勧誘」「高額な献金の指示」、これらが恐怖心を抱かせることによって推進されるとすれば、これも注視すべき点である。心理的に追い詰めることで何らかの恐怖の感情を起こさせている。意図的に強い恐怖心を生じさせようとしているかどうかは、カルト問題になるかどうかを一つの分水嶺とみなすことはできよう。

## 5. カルト問題と社会・文化的ニッチ

カルト問題を恐怖という感情の介在という視点から考えた場合でも、宗教現象と区別されたカルト問題特有の恐怖のようなものを取り出すことはきわめて困難である。また実際に生じているカルト問題で恐怖の問題がどのように作動しているかは同じではない。いくつか共通点を探ることは可能だろうが、やはりそれぞれの問題ごとに作動の様相は異なる。

脳神経科学等の知見で得られていることを踏まえると、感情への働きかけがどうなされるかは、カルト問題を考える際にもっとも注目すべき点であるとは言える。だが現実のカルト問題は多様である。一般的な心の働き、情動や感情の仕組みがしだいに明らかにされつつあるとはいえ、現実のカルト問題への一般的対処法をそこから導き出すのは困難に思える。では宗教研究の立場からはどのような現実的対処の方法があるか。まずは理論的に構築されつつあるフレームに現実の宗教問題の多様性を向かい合わせて、それぞれの状況からいくつか重要な着眼点を取り出していきやり方が考えられる。

1つの重要な視点はナラティブ思考の働きである。ナラティブ思考がカルト問題においても非常に重要な役割を果たすとすれば、日本の宗教文化の脈絡から、実際に多用されているのはどのようなナラティブなのか、そしてそれがカルト問題へと展開するときにはどのような特徴的ストーリーになっているのかを、具体的に取り出していき作業が必要になる。

感情システムと認知システムの相互作用は複雑であるが、認知宗教学が取り組むのは、主として

認知システムにおいて宗教文化の継承物が果たしている役割への着目である。宗教史の研究や現代宗教の観察などによって得られた知見を、感情システムの作動に関する一般的議論に直接的に関与させるのはなかなか困難である。これに対し、個人や社会にどのような宗教的ナラティブが広がると、どのような認知システムを構築しやすいかとか、そうしたナラティブがどこに見出されるかなどについては、宗教史や現代宗教研究が直接的に議論しうる。

カルト問題と宗教史や現代宗教との関わりのありようは、国や地域の主たる宗教が何であるかなどによって変わってくる。たとえば米国であれば UFO カルトと呼ばれるものは多数ある。米国ではキリスト教における携挙 (rapture) の観念を受け入れる人が少数でもいることが、UFO カルトの広がりやすさに関係している可能性がある<sup>(19)</sup>。これに対し、終末のときに携挙が起こり、救われる人は突然この世から姿を消すといった信仰がほとんどない日本では、UFO がこうした形でカルト問題につながることはきわめて少ない。UFO はむしろ遊びの領域にある。

日本では先祖を供養しないと不幸になるといった言説が、宗教家によってなされるだけでなく、通常の会話においても見られる。これは日本における先祖祭祀の観念が深く関わる。先祖祭祀あるいは先祖供養が、習俗として定着していないキリスト教文化圏の多くの国では、「先祖の祟り」が恐怖の情動の引き金となる可能性は低いと考えられる<sup>(20)</sup>。

こうした地域や社会ごとに生じる違いに関して、ニッチ適応という概念を導入したい。ニッチはもともとは生物環境について使われた概念であるが、これを社会・文化的な現象へ適用する<sup>(21)</sup>。それぞれの地域において強い影響を持つ宗教的な言説がある。その地域における支配的宗教文化、一定の影響力を保っている宗教文化の違いを、ある宗教的な運動が広がる上での社会・文化的ニッチという観点から考察できる。

これは梅棹忠夫のエンデミック宗教とエピデミック宗教という区分をさらに展開させるものでもある。梅棹は宗教の広まりを伝染病の広まりに譬えるという大胆な発想をした。梅棹は「宗教はもちろん病気ではない。しかし、その外的側面を見るかぎり、宗教と伝染病の間には、かなりの類似点がある」と述べている<sup>(22)</sup>。その上でエンデミック宗教とエピデミック宗教という区分をした。風土病と流行病に譬えたのである。民俗宗教などはエンデミック宗教に含まれ、世界宗教と呼ばれるものはエピデミック宗教となろうが、梅棹はエンデミック宗教とエピデミック宗教の関係をダイナミックにとらえている。エピデミック宗教がエンデミック宗教に転じることもあり、その逆もあるとしている。

梅棹が疫学的観点から宗教を見たのは、「伝染する」つまり人から人へと広がる局面に注目したからである。宗教と比較するに際して、伝染病について次の5つの点を指摘した。病原体があること。それが広がること。病原体が侵入しても発病する人とそうでない人がいること。広まりに社会環境が影響すること。より一般的な環境が関係すること。これらを宗教の広まりにも当てはめようとする。

宗教が人を介してどのように広まるのかを考えると、これはなかなか示唆するところが大きい分析のフレームである。梅棹の議論では宗教を信じる人がどのような人であるかよりも、宗教はどのような経路でどのような条件のときに広がるかという視点に重きが置かれている。

社会・文化的ニッチの概念は、エンデミック宗教とエピデミック宗教のダイナミックな関係をも包摂できるものである。エピデミック宗教とされる世界的に広がった宗教は、きわめて多様に存在する社会文化的ニッチに適応することで、それぞれの地に広まったとみなせる。エンデミック宗教はいうまでもなく、その地特有の社会・文化的ニッチへの適応である。エピデミック宗教のもっともはげしい形態はパンデミック宗教であるが、これは各地に短期間で社会・文化的ニッチを見出し

たと見なせる。

この社会・文化的ニッチへの適応にドーキンスのミームという視点を重ねると、社会・文化的ニッチへの適応にもいくつかのタイプが生じることの説明が可能になる。日本には近代に数多くの新宗教が形成されたが、一定の勢力を形成したものは社会・文化的ニッチに適応をしたと見なせる。しかし運動の形態や教えの眼目はそれぞれに異なる。それは利用可能なミームのうち、何が使われたかによるという観点で説明ができる。

カルト問題は、社会・文化的ニッチに適応をし、あるミーム群を利用して起きたと仮定するなら、それをなぜ問題としなければならない焦点は、その適応が誰のためのものか、使われたミームがどのような性質のものであったかに置かれることになる。これはカルト問題を起こす団体とそうでない団体とを明確に分ける基準とはならないが、どこが問題で、それはどのようなミームが主に関わってくると考えられるかの議論によって、当該社会におけるカルト問題の境界線を考えていく上で役立つ。

## 6. カルト問題と宗教リテラシー

感情や認知の視点からすると、カルト問題で扱われる内容は、ほとんどが宗教の社会的な広がりの中で生じる内容と重なっている。それゆえカルト問題と宗教一般との固定的な境界線というものは設定しがたいが、それぞれのニッチ状況において、境界領域を形成するものは何かを考察していくことはできる。問題とすべき境界領域は、多くの地域で共通するものと、そのニッチ状況特有のものがあると考えられる。このことは宗教現象がどの地域においても観察される一方で、各地域においてはそれぞれに宗教史がきわめて複雑な展開をしていることから導かれる。

どのように複雑になるかを、ミーム論を踏まえつつ、日本におけるカルト問題でしばしば問題となる言説から一例を示す。「先祖があなたを見守っているので、先祖への感謝の念は忘れないようにしなさい」という言説と、「先祖が悪行を重ねたから、それが現在のあなたの苦しみの原因となっている」という言説には大きな違いがある。前者は日本社会には広く受け入れられている。しかし後者は受け入れる人も一部にはいるが、多くは受け入れない。前者に比べより具体的な言説であるにも拘わらず根拠は乏しいものであり、なによりも脅迫的な面が見え隠れするからである。ただ、両者とも先祖なりその魂なりが、生きている自分に影響をもたらしているとする大前提は共通している。ミーム論的には、それは「祖先信仰ミーム」と呼んでいいかもしれない。それ自体は現代日本において一般的に強い感情をもたらすものではないにしても、恐怖の情動をもたらす要素が加わることで、人によっては、大きな影響を受ける。病気や事故が先祖の悪行の祟りであると面と向かって言われれば、恐怖の情動は大なり小なり生じ得る。

脅迫的な要素の混入によって、個人の情動は強く動かされる。恐れに類するアージが発動したり、恐れが介在するムード状態が生じたりするだろう。一般的な供養を促す気持ちにとどまらず、「先祖が苦しみを味わっているに違いない」という恐怖の原因についてのナラティブ思考が支配的になると、その恐怖を和らげるためのある認知の仕方が受け入れやすくなる。靈感商法と呼ばれているものは、この構図の典型である。もっとも現代日本社会では、脅迫的な要素の強まりはその言説に対する受け入れには一般的に否定的に働くと考えられる。脅迫的な要素が強い宗教勧誘は、日本の宗教文化では主流となりえていないから、社会的批判は強くなる。

宗教が一般的に社会・文化や個人の心理にもたらす影響と、カルト問題における同様の問題とが、分かちがたく関連づけられていることを前提とした上で、カルト問題へ宗教研究はどのような

警鐘的役割を果たしうるのかについて最後に触れたい。カルト問題が宗教研究において避けて通れないのは、そこにある社会・文化における好ましくない展開を、少なからぬ人が感情面でははっきり感知しているのに、現実には絶えず生じているからである。現代日本社会に限ってもこの点は明白である。カルト問題をめぐる議論は複雑で微妙であるが、認知宗教学の立場から、少なくとも2つのポイントを挙げたい。1つは明らかに問題とされたケースについて、それぞれどのような点が問題であったかを分析していくことである。1つは警鐘的な役割として、宗教リテラシーについて考えていくことである。

感情システムと認知システムの相互作用に着目するとき、認知宗教学は主として認知システムからの作用に焦点を当てることになる。感情システムはきわめて複雑で不明なことが多い上に、宗教に特化された感情を取り出すのも困難なので、感情システムの働きについて直接的な議論を展開することは難しい。これに対し、認知システムに関しては、認知のあり方が文化的な継承に基づく部分が多いので、宗教史や現代宗教で見出されたことは、議論の場に提供できる。それぞれの社会や文化（のニッチ環境）において、どのような認知システムがどのような作用をしてきたか、そして現に作用しているかについて検討できるからである。

ダマシオは前述の書で「文化的な危機の問題」に言及している。各個体に見出されるホメオスタシスは、大集団に、文化や文明の全体に対して自発的な関心を持つわけではないとする。社会、文化、文明は並行する別個の組織によって構成され、各組織はほつれた境界によって仕切られ断片化されているのが普通である。従って、文化の多様性は対立の萌芽を宿す。アフェクト(感情)と理性の調和を図る大規模で啓蒙化された試みが不可欠だが、しかし実を結ぶ保証はないとしている。

こうした問題に対処する決まった道筋は存在しないと言えるが、宗教リテラシー教育は検討すべき1つの選択肢になる。宗教リテラシーの観点からは、カルト問題は原理主義の問題とかなり重なることに気付かされる。カルト問題も原理主義の問題も、宗教史の多様性とニッチ状況における一つの産物とみなせる。とりわけ社会における正当な宗教の教えや活動は一義的に定まらないような状況を背景に、カルト問題も原理主義の問題もじやすくなっている。そして情報化やグローバル化が進行する社会では、ともにより深刻な問題として浮かび上がってくる<sup>(23)</sup>。

多様な宗教史を研究の対象としてきた宗教研究は、社会・文化的なニッチ状況を勘案して、当該社会において長く継承されていて、社会的に批判の少ない宗教のあり方は何であるのかを探っていける。宗教も全体としては、いわば社会的ホメオスタシスとしての作用があると見なせる。宗教の遍在性がその傍証である。感情システムの複雑さゆえ、宗教リテラシーを培って認知システムへの貢献を図っても、効果は部分的で微弱に過ぎない。しかしこの迂遠な方法以外に、汎用性のあるやり方はなかなか見出せない。

宗教リテラシー教育において、テクノロジーの発展への対応は、今後最も困難さを抱える課題の1つになる。宗教は、言説を通して「超越的存在」「死後の世界」などを想起させるが、テクノロジーの発達には人間の認知のあり方にこれまででない様相を提示する。時空を超え、タイムトラベリングするのが人間の認知の特徴であるが、テクノロジーがその認知能力を拡張し、一部の機能をいわばアウトソーシングする。たとえば、2020年2月には韓国のVR企業が、亡くなった娘を母親にVRで見せて会話させるという試みをし、その様子がYouTubeにアップされた<sup>(24)</sup>。非常に多くの人々がこれを閲覧したが、この仕組みが巧妙になっていくと、これまで「見えない世界」の話であったことが「見える世界」へと変換される。これまでは言説によって提示されていた見え



ない世界が、可視化される。その心理的影響がどのように及ぶかについて議論するには、まだ資料・データや研究例が十分ではない。

カルト問題の対象になる団体における勧誘では、恐怖感をことさら煽る例があることが知られている。そのような勧誘の場では、「今ここ原理」と呼ばれる情動反応が絶えず介入する。「今ここ」の情動反応は、人間のみならず生物全般に生じる。アージ理論を展開した戸田は、野生環境において、注意の対象は自動的にもっぱらその時その場に存在するとして、高度アージのもとで働くものを「今ここ原理」と呼んでいる。文明環境では重要な対象は目の前にあるとは限らないが、「今ここ原理」は作動する。高度アージ、つまり非常に強い情動が喚起されたときは、冷静な低度アージ下では決してしないような愚かなことをしてしまいがちとする。アージ強度を低下させるよう感情の制御が必要だが、それは難しい。状況認知の変更は熟練を必要とする技能で「今ここ原理」が働き始めてからでは手遅れという<sup>(25)</sup>。カルト問題の対象となるような団体や原理主義的な団体による勧誘では、この手遅れになった状況が生じやすいと考えられる。

こうした状況に対する宗教リテラシーはとくに重要である。正しい宗教を知っていれば、間違った宗教を斥けることができるといった類の主張が一部にあるが、これは感情の問題をあまり重要視していないと考えられる。この点をより深く認識するには、宗教史一般ではなく、カルト問題ではどのようなやりとりが人を恐怖の情動を生じさせたかについての実際の事例を積み重ねていくことが欠かせない<sup>(26)</sup>。

広く言うなら、人間や社会にとっての危険領域を文化的に絶えず見定めようとする営為の補助手段としても、認知宗教学の視点は展開しようとする。個々の事例から、認知宗教学の視点から取り組むべき対象を探す。感情がどう利用（悪用）されているか。なぜそれは効力をもったのか。これらは遺伝的要素と社会文化的要素の双方に目を配る必要のある課題である。認知システムを通して感情に影響を与えるのは、個人においては記憶であるし、社会においては文化的継承物である。ミームの概念を使うなら、ミームも感情に影響を与える。むろん個人の記憶は千差万別で、宗教文化の特徴もさまざまである。それゆえ、数多くの事象、事例（宗教史・宗教現象など）を観察し、そこから人間や社会・文化にとっての危険領域を推測していく作業は果てしないものである。社会・文化は絶えず変わるし、社会・文化的ニッチの様相も絶えず変わるので、これは終わりなきプロセスである。

人間は常に外部情報と内部情報、そして脳内の情報に対応して生きている。このうち神経系、ホルモン系でやりとりされる内部情報は意識的な関与が困難である。脳内のネットワークがもたらす脳内情報も同様である。しかし感覚器官がもたらす外部情報は、ある程度意識的に捉えられている。たとえ部分的であっても言説化されたり、ナラティブとして表現されているものは、脳内の情報の処理を推測する一つの手段にできる。そのような実際の宗教の現場での観察と、脳神経科学その他で得られている人間の認知や感情に関する研究の成果と照らし合わせることで、議論の足場となる。

## むすび

カルト問題では理性より感情、意識より無意識の働き、文化的継承だけでなく、個々人に遺伝的に継承されたものの働きが大きいことを指摘した。宗教リテラシー教育を考えるときには、日本に限っても、そこに展開する多様な宗教文化を理解するための視点を養いながら、宗教に関してどのような社会的問題が生じているかへの広い目配りが求められる。日本の現代社会をカルト問

題が展開していく際のニッチという観点から検討するなら、何がとりわけ重要な宗教文化面での継承物（あるいはミーム）になっているかを探っていかなければならない。

日本社会を1つのニッチとして捉えるのは、現代のカルト問題の議論においては適切なスケールと考える。ニッチはそのスケールをさまざまに設定できる。自然環境でも、たとえば琵琶湖の周辺を1つのニッチ環境とみなすこともできるし、対馬や佐渡島のような規模の島を1つのニッチ環境とみなすこともできる。日本列島のスケールで考えることもできる。同様に社会・文化的ニッチの時代や地域もスケールはさまざまに設定できる。ただ現代社会は、人、モノ、情報がボーダレスに交流していて、細かいニッチスケールはなかなか難しくなっている。かつて民俗調査で村単位でその特徴をいくぶん取り出せた時代とは大きく異なる。それゆえ宗教問題とくにカルト問題や原理主義の問題などをニッチ環境との関係で議論するときには、主に日本語が使用されているという文化的環境も大きな要因となるので、現代日本社会のような規模がもっとも問題を取り出しやすい

宗教リテラシーの観点から、現代日本社会でカルト問題についての議論する上で重視すべき文化的継承物を見出していく作業は、宗教研究に関わる教員であっても、個々の知的な蓄積によって対処するのが困難である。宗教リテラシーについて教える側が、緊密なネットワーク形成を図っていくことが必要になる。カルト問題自体が、グローバル化と情報化の進行によってますます複雑化し、どこがカルト問題の境界線になるかの見極めは非常に難しくなっている。当然、何に警戒すべきかの議論も複雑になる。こうした状況にあって、教える側の個人的な知識と判断によってリテラシーを構築していくのは無理がある。

2011年に設立された宗教文化教育推進センターは、宗教文化教育を多くの大学教員のネットワーク形成と協力によって実質化を図るものだが<sup>(27)</sup>、宗教研究の分野で、カルト問題や原理主義の問題に対するリテラシー教育を具体的にどのように進めるかの議論は、まだ草創期ないしは準備期と呼ぶべき段階である。とくに本稿で述べたような感情の果たす役割に着目した研究は乏しいと言わざるを得ない。宗教史や現代宗教の研究から得られる史料や観察結果を集積する。具体的にカルト問題の様相を明らかにしていく。これらを基盤にして、人間が遺伝的に継承している感情の働きと認知の相互作用に注目し、文化的に継承されて個々人に影響を与えている認知のフレーム、あるいはミーム的役割を果たすものを取り出していく試みが、きわめて重要である。

## 註

- 1 日本におけるカルト問題はヨーロッパにおけるセクト問題とほぼ重なる。それゆえ「カルト・セクト問題」を総称にする場合もある。これについては井上順孝編『現代宗教事典』弘文堂、2005年の「カルト・セクト問題」の項目を参照。
- 2 認知宗教学については拙論「宗教社会学・宗教心理学から認知宗教学への接続」『ラク便り』95号、2022年を参照。
- 3 これについては拙著『若者と現代宗教』筑摩書房、1999年を参照。
- 4 1951年には新宗教教団の多くが加わって新日本宗教団体連合会（新宗連）が結成されたが、こうした動向も関係している。
- 5 日本のメディアでは「旧統一教会」の名称が広く用いられている。どういう経緯でこの表現が定着したか不明であるが、現世界平和統一家庭連合が日本において「統一教会」を正式名称としたことはない。宗教

法人として認証された時の名称は世界基督教統一神霊協会である。これを2015年に現在名に改称したのである。それまでの略称ないし通称としては統一教会あるいは統一協会が一般的であった。この経緯からするならば、団体の一貫性を示したいならば、通称・統一教会がもっともふさわしいと考える。なお英語表記では Unification Church が定着しているが、文鮮明の名から Moonies と呼ばれることもある。

- 6 櫻井義秀『霊と金—スピリチュアル・ビジネスの構造』新潮社、2009年、同『信仰か、マインド・コントロールか カルト論の構図』法蔵館、2023年、紀藤正樹『マインド・コントロール』アスコム、2012年、同『カルト宗教』アスコム、2022年などにおける議論を参照。
- 7 戸田のアージ理論については戸田正直『感情一人を動かしている適応プログラム』東京大学出版会、1992年、同「感情システムと認知システム：アージ理論の立場から」『認知心理学研究』3-2、2006年、同「感情・情報・社会」『社会情報』2-1、1993年を参照。
- 8 ジェームズは1884年の「感情とは何？」（“What Is an Emotion?”）という論文の中で、この考えを示し、翌85年にデンマークの心理学者カール・ラング（Carl Lange）が同じような説を提唱したのでジェームズ＝ラング説と呼ばれる。
- 9 ドーキンスのミーム論については、リチャード・ドーキンス『生物＝生存機械論—利己主義と利他主義の生物学』紀伊国屋書店、1980年（1991年に『利己的な遺伝子』と改題されて出版）を参照。原題は Richard Dawkins, *The Selfish Gene*, Oxford University Press, 1976.
- 10 アントニオ・ダマシオ『進化の意外な順序—感情、意識、創造性と文化の起源』白揚社、2019年。原著は Antonio Damasio, *The Strange Order of Things: Life, Feeling, and the Making of Cultures*, Pantheon Books, 2018.
- 11 アントニオ・ダマシオ『感じる脳』ダイヤモンド社、2005年や『デカルトの誤り』筑摩書房、2010年などを参照。
- 12 嶋田総太郎『認知脳科学』コロナ社、2017年。
- 13 Joseph LeDoux, *Anxious: Using the Brain to Understand and Treat Fear and Anxiety*, Viking, 2015.
- 14 過誤記憶がもたらす社会的影響については、ジュリア・ショウ『脳はなぜ都合よく記憶するのか』講談社、2016年参照。原著は Julia Shaw, *The Memory Illusion: Remembering, Forgetting, and the Science of False Memory*. Random House, 2016.
- 15 虫明元『学ぶ脳』岩波書店、2018年。
- 16 アメリカ映画『ブルース・ブラザーズ』（1980年制作）で、主人公たちが教会を訪れ、牧師の説教を聞くシーンがある。そこで牧師は死者たちが「神の光を求めてもみつからない。遅すぎる。もう遅すぎる」と述べ、今すぐ回心するように訴える。教会にいた人々はこれを聞いて熱狂する。ナラティブ思考の影響力は当然とされている映画の場面である。
- 17 1995年12月に登録され翌年1月に刊行された『ギューヤール報告書』にはセクトを識別する「10の指標」が掲げられている。それらは①精神の不安定化、②限度を超えた金銭の要求、③元の環境からの断絶の誘導、④身体の健全さに対する侵害、⑤児童の徴用、⑥幾許かの反社会的な教説、⑦公共秩序の攪乱、⑧多くの裁判沙汰、⑨既存の経済経路からの逸脱傾向、⑩公権力に侵入する試み、である。
- 18 キース・E・スタノヴィッチ『心は遺伝子の論理で決まるのか—二重過程モデルでみるヒトの合理性』みすず書房、2008年。原著は Keith E. Stanovich, *The Robot's Rebellion: Finding Meaning in the Age of Darwin*, University of Chicago Press, 2004.
- 19 新約聖書の「テサロニケ第一」4章15-17節には、携挙に関する次のような記述がある。  
「主の言葉によって言います。主が来られる時まで生き残る私たちが、眠りに就いた人たちより先になることは、決してありません。すなわち、合図の号令と、大天使の声と、神のラッパが鳴り響くと、主ご自身が天から降って来られます。すると、キリストにあつて死んだ人たちがまず復活し、続いて生き残っている私たちが、彼らと共に雲に包まれて引き上げられ、空中で主に会います。こうして、私たちはいつまでも主と共にいること

になります。」(聖書協会共同訳)。

- 20 先祖供養を重視する日本の仏教系新宗教が、米国の非日系人にはなかなか理解されなかった歴史がある。
- 21 拙論「宗教のグローバル化現象に対するニッチ概念の適用」『宗教研究』89巻 Suppl号、2016年を参照。
- 22 梅棹忠夫『文明の生態史観』中央公論社、1967年。
- 23 情報化と原理主義(ファンダメンタリズム)に関する議論は、拙論「ファンダメンタリズムの挑戦」川田順造他編『開発と文化3 反開発の思想』岩波書店、1997年、及び同「情報化が宗教にもたらしたファンダメンタリズムの先鋭化」『宗教と民族』改訂版、学習研究社、2002年を参照。
- 24 YouTubeの動画は <https://www.youtube.com/watch?v=uffTK8c4w0c>
- 25 戸田正直「感情・情報・社会」『社会情報』2-1、1993年を参照。
- 26 これに関しては、たとえば大阪大学においてなされている「カルト対策」のような実践的な方法も視野に入れることが必要になってくる。YouTubeにアップされた「学生の皆さんへ：カルト集団などの不審な勧誘に注意」という動画は4本からなる。その1本目の動画のURLは <https://www.youtube.com/watch?v=gdNnCFIlgQGU>。
- 27 宗教文化教育推進センターの設立の経緯については、拙論「宗教文化土制度発足への歩み」『國學院大學研究開発推進機構 日本文化研究所年報第4号』2011年、同「グローバル化・情報化時代における宗教教育の新しい認知フレーム」『宗教研究』85-2、2011年を参照。また、宗教文化教育と宗教情報リテラシーの関係については、同「教育における宗教情報リテラシー—「宗教文化土」制度発足の背景」『宗務時報』113、文化庁宗務課、2012年を参照。